

或る年、春がきて、私は幼稚園へ行くのだと言われ、房のついた帽子をかぶせられた。胸にはハンケチを安全ピンでとめ、簾で編んだ弁当入れのバスケットをもたされた。それが当時の幼稚園児の恰好であった。たぶん小学校へあがる一年前のことだから、昭和五年ということになる。

そのころ笹塚は、震災後の新しい住宅地だった。家の前に川があり、橋を渡って川沿いの道をゆくと、川下に幼稚園があった。生垣にかこまれた庭には、ぶらんこや滑り台のほか、新式のジャングル・ジムがあった。

天神さまの太鼓橋

子どもたちはジャングル・ジムに群れたが、

私の関心は、もっぱら砂場に向けられた。

ふつうの家の小さな砂場とはちがって、幼稚園の砂場は格段に大きかった。砂場いっぱい自動車を作ると、オープン・カー（そのころは幌自動車といった）の座席に子どもが四人は坐ることができた。こわれないように、みんなそっと乗

大宮真琴

り降りした。どういわけか、ほかの子が作るとうまく出来なかつたので、みんなは私に期待した。そんなわけで、朝いちばんに砂場で自動車をつくるのが日課になった。

室内にも面白いものがあつた。板戸の押入れの中に、コルクで作った積木の化け物のようなものがあつた。はじめは呆気にとられたが、やがてこれを使って本物の家を作ることと思いついた。壁には窓をあけ、身をかがめれば入れる玄関も

あり、室内には子ども椅子を運んできた。これが人気を博したが、難点は、へたに身動きすると壊れてしまうことだった。だから先生が仲間に入ろうとすると、大声をあげて阻止した。

遊びに興じていると、誰も家に帰ろうとしなかつた。先生も、早く家に帰りなさい、と言つたことはなかつた。

はじめは嫌々だった幼稚園も、けっこう楽しいものになつていったが、私にはひとつだけ、どうにも我慢ならないものがあつた。お遊戯というやつだった。手をつないで輪になり、歌など歌うことは女の子のやることだ、と思ひこんでい

たから、私はけつして仲間に加わらなかつた。

帰り道にも、いろいろすることがあつた。川沿いの道には団栗（どんぐり）の太木が並んでいた。団栗の実は、遊びのときの通貨だつた。からになつたバスケットにいっぱい詰めて帰り、近所の小さい子たちに、あとで分配するのである。

面子（めんこ）と団栗は子どもたちの貴重な財産だつたからみんな自分の隠し場所をどこかにもつていた。

川向うに天神さまがあつた。天神さまの境内に行くには、橋をわたつて、ぐるっと回つてゆかなければならなかつたが子どもたちはいつもそこへ集つた。

天神さまの小さな祠の前には賽銭箱があり、鰐口の紐がぶらさがつていた。団栗の大きいのを選んで賽銭箱に入れ、それから、色とりどりの布を綯いあわせて太い紐を引っぱるのだが、子どもの力ではどうしても鰐口は鳴らなかつた。まゝくなくて、一人ずつ試みるが、どうしても駄目だつた。たまに大人が通りかかき、よいしょと紐を曳いて鳴らすことがあつた。すると鰐口は醜い音をたてた。子どもたちは胆をつぶして四散し、木の下に隠れて様子を見がうのだった。

天神さまの境内に、石の小さな太鼓橋があつた。これは幼

稚園新式のジャングル・ジムより、ずっと魅力的だつた。ひとりひとり順番に太鼓橋に挑戦したが、うまく上まで駆け上れる子は減多になかつた。前の日に成功しても翌日は失敗するという案配だつた。一同まるくなつて、固唾を呑んだ。成功する子がいると歓声があがつたが、下りにはきまつて転がり落ちた。

天神さまの境内から、夕焼けが見えた。西の空が赤く染まると、手をつないで歌う時間だつた。はじめの歌は、からすなせ啼くの、だつた。それから、かごめかごめ、があつて、最後はいつも、通リヤンセ通リヤンセ、になつた。

天神さまの境内では、男の子も女の子もいっしょに手をつないで、通リヤンセを歌つた。天秤棒をかついで通る夕方の物売りの声に負けじと、誰もかれもが大声で歌つた。そのときには、幼稚園でのお遊戯への拒否反応はなかつた。

（お茶の水女子大卒）

